

北海道在住の日本語非母語話者が遭遇する方言

斎藤 敬太（跡見学園女子大学）

1. はじめに

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を経て、日本語を母語としない人々（以下「日本語非母語話者」）の来日が回復している。出入国在留管理庁(2024)によると、2023年度の北海道の在留外国人数は56,485人に上る。この数自体は全国で16番目であるが、斎藤(2024b)では、コロナ禍の真っ只中であった2021年度の数からの増加率は、北海道が55.6%増で全国一高いことを指摘している。彼らの在留資格として多いのは主に「特定技能」(8,303人)や「技能実習」(14,157人)であり、雇用などの関係上、留学生といった他の在留資格よりも地元の日本語母語話者との接触の機会が多い。そのような中で考えるべきことが方言との遭遇である。

北海道では地域差はあるものの、老若男女問わず方言が話される一方で、方言意識は薄い（平山他編1997）。そのため、意識せずに方言を使用する場面も当然現れる。本稿では、このような北海道方言に見られる特徴を考えつつ、北海道で暮らす日本語非母語話者が方言に遭遇する可能性の一例として「言語景観」（＝看板・ポスター類）に見られる北海道方言を取り上げることで、最終的には彼らの方言問題を軽減するツール（方言理解支援ツール）の開発につなげたい。

2. これまでの研究

日本語非母語話者と方言に関する研究は、これまでも試みられてきた。ロング(1992)では、大阪において日本語非母語話者であるロング自身が地元の日本人複数人に道尋ねを行ったところ、半数以上が日本語非母語話者に対してであっても何かしらの方言を用いることを明らかにした。このことから、相手が日本語非母語話者であっても必ずしも標準語で話すとは限らないことが分かる。津田・小林(2020)では、具体的なツールを挙げながら、方言に関する外国人向けの支援対策の重要性について述べている。山下(2014)では東北地方在住の日本語非母語話者を対象とした災害時に使えるカードタイプの方言集の作成を行った。今村・中島(2015)では、外国人看護師・介護福祉士候補者に対し、方言の問題の所在、あるいはどのように対処しているかなどについて調査をした。

また、日本語非母語話者を対象とした方言教材については、地域日本語教育で用いられる日本語教材に方言の項目があるものとしてJTM研究会(1999)、全国語学教育学会山口支部日本語教育部会(2000、2002)などがあるものの、あくまでもコラムの一部であり、方言をメインに扱ったものではない。日本語非母語話者を対象に作成された方言教材としては、今井(2002)、熊本県立大学日本語教育研究室(2009)、後藤(2012)、斎藤(2017)などが挙げられる。しかしながら、外国人と北海道方言に関する研究は管見の限り見られない。

また、これらの中には多言語訳を付したものが見られる（山下2014、斎藤2017など）が、近年全国的に増加しているベトナム人の母語であるベトナム語を付したものは見られず、斎藤(2024a)では日本語非母語話者向け東北方言集作成時にベトナム語訳を考慮することを提案している。北海道においても出入国在留管理庁(2024)によれば、2023年の北海道の在留外国人数のうち最も多いのはベトナム人(12,313人)であり、中国人(9,755人)、インドネシア人(5,555人)、韓国人(4,357人)などを大きく上回る。そのため、北海道について方言理解支援ツールを作成する場合もベトナム語も考慮する必要がある。

3. 北海道の方言理解問題

北海道方言については、大きく「海岸部方言」と「内陸部方言」に分けることができる（平山他編1997）。方言区分図として石垣(1982)に掲載された図を示す（図1）。

例4) 書く (カグ)

のような語中語尾のカ行が有声化する現象や、

例5) 息 (エギ)・駅 (エギ)

といったイとエが区別されない現象が存在する。

最後に「方言文法の問題」としては、北海道方言に特徴的な接尾辞の存在などが挙げられる。

例6) この鍋は食べべらさる⇒この鍋は(美味しくてついつい) 食べてしまう

「～(ら)さる」主に自発・可能を示す接尾辞だが、動作主の意図性を否定するものであり、「食べらさる」は「(美味しくてついつい) 食べてしまう」と標準語を書いたものの、「字が書かさない」は「(書こうとしたのにペンのインク切れなどで、書く行為を行っているにもかかわらず) 字が書けない」のように「ついつい～する」といった標準語では必ずしもうまく対応できない。

方言理解支援ツールを作成する場合も、これらの諸問題を考慮したものにする必要がある。

4. 北海道方言の言語景観調査

町中を歩くと、様々な看板やポスター類、つまり「言語景観」が目に入る。言語景観には、方言を用いたものも少なくない。北海道在住の日本語非母語話者は、その言語景観が誰に向けられたものであれ、その脇を歩けば目に入る。つまり彼らの言語環境を形作る一つの要素として言語景観があるのだ。

外国人の言語環境として言語景観を取り上げたものには斎藤(2022)がある。斎藤(2022)は東北地方を対象にしているが、東北地方では仙台市や三沢市などの一部を除いて方言による言語景観(以下「方言景観」)を多く目にすることが紹介されている。また、これらの方言景観は漢字ではなく仮名文字で書かれることが多く、「平仮名で書かれることの多い方言景観は、むしろ外国人住民(特に非漢字圏)にとって読みやすく、標準語の言語景観よりも興味を引きやすいものである」とも述べている。東北方言と共通点の多い北海道方言の言語景観においても、同じことが言えるのではないだろうか。

また、北海道の方言景観を文化的観光資源として扱ったものにはロング(2022)が挙げられる。こちらの研究の主眼は外国人の言語環境ではないが、町中でみられる北海道方言の言語景観を取り上げていることから、北海道在住の外国人が方言景観に遭遇するということは十分予想される。

本稿では、筆者が北海道内(岩見沢市、東神楽町(旭川空港)、札幌市、由仁町、小樽市、旭川市(図の登場順))を調査中に目に入った方言景観を紹介する。調査地を示したものが図2である。

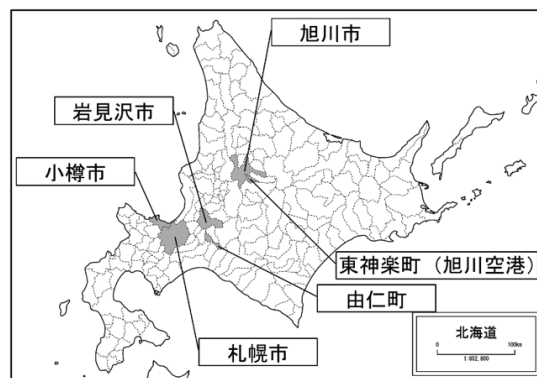


図2. 調査地

言語景観調査においては、複数の表現を目にすることはできたが、想像していたよりも同じ表現が使われている印象だった。以下に、特に目に入ったものを挙げる。

4.1. 「なまら」

まずは「なまら」である。「とても」の意味で用いられている表現である。筆者がこれまで複数回北海道を訪れた上での印象として、最もよく目にする表現でもある。図3は、岩見沢駅にあった広告に書かれた「なまら美味しい。」である。これは「とても美味しい。」という意味である。



図3. なまら美味しい

しかし、「なまら」は多用されるあまりか本来の用法を超えたものが見られる。図4は、旭川空港にあった「なまらかま棒」である。本来「なまら」は「とても」を意味する副詞であるため、「かま棒」（かまぼこ棒）という名詞に接続させる形容詞的な用法はない。商品名であるため多少の非文的なものも容認されることはあるかもしれないが、北海道方言話者に確認したところ、「ちょっと無理矢理すぎ」との意見が出た。

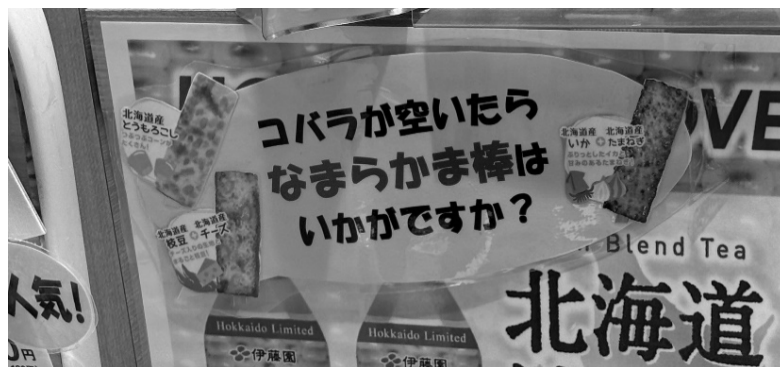


図4. なまらかま棒

4.2. 「～べ」類

助詞「～べ」を含むものも多く見られた。「～べ」には意志、推量、勧誘といった用法がある。図5は札幌駅の自動販売機に書かれていた「ちょこっと一息つくべ」である。「ちょこっと一息つこう」といった勧誘の意味で用いられている。

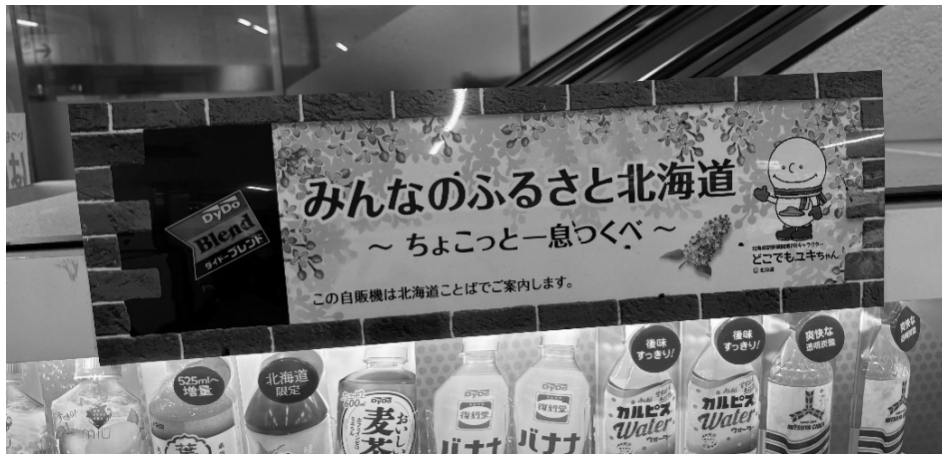


図5. ちょこっと一息つくべ

「～べ」が多く見られる理由として考えられるのは、その幅広い用法に加え、「～べや」「～べさ」といった他の助詞と複合した表現が存在することである。図6は由仁駅にあった「飲酒運転なまらやべーべや」「令和スタート！いまこそだべさ。」である。「飲酒運転とてもやばいだろう」「令和スタート！いまこそでしょう。」といった意味合いになり、「～べや」と「～べさ」をうまく訳し分けられていないが、北海道方言話者によると「～べや」の方が男性が使う印象であり、微妙にニュアンスの違う表現である。なお、「やべーべや」は図中の熊のキャラクターの名称そのものでもあり、北海道方言の同表現と“bear”（熊）をかけたものとなっている。



図6. 「飲酒運転なまらやべーべや」「令和スタート！いまこそだべさ。」

4.3. 特定の食品の方言名

また、北海道を代表するような特定の料理や野菜といった食品の方言名がそのまま言語景観に現れたものも多く見られた。図7は小樽市内のショッピングモールにあった「ざんぎ」である。「ざん

ぎ」は中国語に由来して昭和 30 年代から言われるようになったとされる（NHK 北海道 2023）比較的新しい方言であり、かつ「唐揚げ」と類似する料理ではあるが、北海道の代表的な料理の一つとして取り上げられることも多く、その名称は全国的に知られている。そのため、あえて標準語「唐揚げ」にすることなく、「ざんぎ」とすることで北海道らしさを示すことが可能となる。道外にあるレストランなどでも北海道名物として「ざんぎ」という名称を意図的に使用して「唐揚げ」と区別することも少なくない。



図7. 「ざんぎ」

図 8 は旭川市内のコンビニエンスストアののぼりに書かれた「ゆでとうきび」である。「とうきび」は「とうもろこし」の方言名であるが、とうもろこしの生産量は国内では北海道が圧倒的に多く（農畜産業振興機構 2023）、北海道の代表的な野菜としても知られている。そのため、北海道土産などにも、とうもろこしを使用したものや、とうもろこしの味付けをしたものが多く、そこにもあえて「焼きとうきび」「とうきびチョコ」「とうきび茶」のように方言名を用いたものも少なくない。土産に用いるものに関しては、やはり北海道らしさを示す意味も込められていると考えられる。



図8. 「ゆでとうきび」

以上、北海道の方言景観を見てきた。写真からも明らかなように、やはり北海道においても方言は仮名文字で書かれることが多いようだ。

また、今回見た限りでは、言語景観においては、多用されてよく目にする北海道方言はある程度傾向があり、特に①「なまら」、②「～べ」類、③特定の食品の方言名の使用がよく見られることが明

らかになった。

5. 北海道の日本語非母語話者の方言理解問題を軽減するために

筆者は、北海道の日本語非母語話者の方言理解問題を軽減することを目的として、方言理解支援ツールの開発を目指す。そのため、斎藤(2017)作成時に実施した次のような手順で研究を行いたい。

①日本語母語話者に対する方言使用調査（斎藤 2018a）

飯豊、日野、佐藤編(1982)、小野(1993)、平山他編(1997)などを参考に方言リストを作成し、北海道方言話者に質問紙調査およびインタビュー調査を行う。

②日本語非母語話者に対する方言理解調査（斎藤 2019）

北海道方言話者による方言会話を収録し、北海道在住の日本語非母語話者に聞かせることでどの程度北海道方言を理解できるかを測る。

③方言の多言語翻訳（斎藤 2018b、2020、2023）

平易な日本語、英語に加えて北海道在住日本語非母語話者の国籍を考慮してベトナム語、中国語、インドネシア語、韓国語などが必要であると考ええる。

④方言理解支援ツール利用者のフィードバック（斎藤 2021）

方言理解支援ツールを作成した後、実際に利用者の声を聞くことが重要である。斎藤(2021)では作成後にフィードバックを得るところで終了しているが、まずはツールのパイロット版を作成し、利用者からのフィードバックを得たうえで最終版を作成するほうがよりニーズに合ったツールを作成できると考える。

しかしながら、これらを実行するにあたり、上述したように北海道方言の地域差の現状を知るための道内各地での調査の実施や、様々な年代、性別などを考慮した北海道方言の各地の方言話者の協力者を得られるか、北海道在住外国人の国籍などの道内の地域差の有無、方言理解支援ツールのより良い提供方法（冊子、ホームページ、PDF、電子書籍、アプリ、...）などについても考えなければならない。

<参考文献>

飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一編(1982)『講座方言学 4—北海道・東北地方の方言—』国書刊行会

五十嵐三郎(1982)「北海道方言の概説」飯豊、日野、佐藤編(1982)、pp.1-61

石垣福雄(1982)「北海道沿岸部の方言」飯豊、日野、佐藤編(1982)、pp.63-91

今井多衣子(2002)『高知の生活語 2002』

今村かほる、中島祥子(2015)「EPA による外国人看護師・介護福祉士候補者の直面する方言の問題について」今村かほる編『「災害対応のための方言活用システムと方言ツールの開発」報告書』pp.86-97

NHK 北海道(2023)「ザンギの発祥とザンギとから揚げの違いは？」『NHK 北海道ホームページ』

<https://www.nhk.or.jp/hokkaido/articles/slug-n2b5a2c869977/>（最終閲覧日：2024 年 12 月 30 日）

小野米一(1993)『北海道方言の研究』学芸図書株式会社

熊本県立大学日本語教育研究室(2009)『話してみらんね さしより！熊本弁』科研費による成果物

後藤典子(2012)『聞いてわかる 介護の山形ことば』科研費による成果物

斎藤敬太(2015)「東北地方の外国人住民向け方言教材の開発」2015 CAJLE Annual Conference Proceedings, CAJLE, pp.261-268

- 斎藤敬太(2017)『東北地方の外国人住民のための「くらしの方言集」』平成 28 年度笹川科学研究助成により印刷（<http://saitokeita.web.fc2.com/hougenshu/>にて PDF 公開）
- 斎藤敬太(2018a)『『東北地方の外国人住民のための「くらしの方言集」』作成に向けた語彙・文法事項の使用実態調査』『The Basis: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』8、pp.129-139
- 斎藤敬太(2018b)「東北地方の外国人住民を対象とした方言理解支援ツールにおける翻訳上の問題点—東北諸方言とポルトガル語の対照研究—」Estudos Japoneses, 39, Centro de Estudos Japoneses da Universidade de São Paulo, pp.61-91
- 斎藤敬太(2019)「東北地方在住の日本語非母語話者を対象とした方言集作成に向けた方言理解調査」『日本方言研究会第 117 回研究発表会発表原稿集』、pp.25-32
- 斎藤敬太(2020)「東北地方の外国人住民を対象とした方言理解支援ツールにおける翻訳上の問題点—東北諸方言と英語の対照研究—」『津田塾大学紀要』52、pp.205-238
- 斎藤敬太(2021)「東北地方在住の日本語非母語話者を対象とした方言理解支援ツールの評価」『津田塾大学紀要』53、pp.183-192
- 斎藤敬太(2022)「東北地方の言語環境としての方言景観」ダニエル・ロング、斎藤敬太『言語景観から考える日本の言語環境—方言・多言語・日本語教育—』、春風社、pp.247-258
- 斎藤敬太(2023)「東北地方の外国人住民を対象とした方言理解支援ツールにおける翻訳上の問題点—東北諸方言とインドネシア語の対照研究—」『津田塾大学紀要』55、pp.219-252
- 斎藤敬太(2024a)「東北地方在住のベトナム人を対象とした方言理解支援ツール」『異文化間教育学会第 45 回大会発表抄録集』 pp.119-120
- 斎藤敬太(2024b)「北海道在住の日本語非母語話者が遭遇する方言問題」『2024 年日本語教育国際研究大会（ICJLE2024）』ポスター発表、ウィスコンシン大学マディソン校、アメリカ合衆国ウィスコンシン州マディソン市
- JTM 研究会(1999)『こんにちは とくしま I—徳島でくらす外国人のための日本語教材—』あわゆず企画
- 全国語学教育学会山口支部日本語教育部会(2000)『おいでませ山口 1—外国人のための入門日本語教材—』
- 全国語学教育学会山口支部日本語教育部会(2002)『おいでませ山口 2—外国人のための初級日本語教材—』
- 津田智史、小林隆(2020)「災害と方言をめぐる課題と方針」小林隆、今村かほる編『実践方言学講座 第 3 巻 人間を支える方言』くろしお出版、pp.93-113
- 農畜産業振興機構(2023)「スイートコーンの需給動向」『独立行政法人農畜産業振興機構ホームページ』https://vegetable.alic.go.jp/yasaijoho/yasai/2307_yasai1.html（最終閲覧日：2024 年 12 月 30 日）
- 平山輝男、大島一郎、大野眞男、久野眞、久野マリ子、杉村孝夫、小野米一編(1997)『北海道のことば』明治書院
- 山下暁美(2014)「命綱としての日本語—「災害時命綱カード」の提唱—」『応用言語学研究』16, 明海大学 pp.57-74
- ロング、ダニエル(1992)「日本語教育における「方言教育」の問題点 日本語教育」76、pp.42-54
- ロング、ダニエル(2022)「北海道の文化的観光資源としての言語景観」ダニエル・ロング、斎藤敬太『言語景観から考える日本の言語環境—方言・多言語・日本語教育—』春風社、pp.259-268
- 出入国在留管理庁(2024)「在留外国人統計（旧登録外国人統計）在留外国人統計 月次 2023 年 12 月」『出入国在留管理庁ホームページ』https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=data_list&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20230&month=24101212&ctclass1=000001060399（最終閲覧日：2024 年 12 月 30 日）